

## 夢窓幼稚園通信第7号

2014年 4月 30日

「はじまり はじまり！」と、幕が開いて お話 や 舞台 が 始まる  
ときは、いつでも 心は わくわく どきどきです。

「きっと きっと」と、様々な予想や予感に包まれて心は  
ふくらみますが、同時にまた、どんな世界が待っているのか  
……と、少々落ちつかないような気分です。 そのどちらもが  
物語や舞台芸術に立ち合うときの なくてはならない醍醐味  
であり、魅惑的などころなのかもしれませんが、それぞれの自分の人生ドラマ  
となると、必ずしも魅カの世界とだけは言ってはいられず、最終的  
には拍手喝采となったとしても、そのはじまりから 途中では七転八倒、  
不安やくじけそうになることも多いのが 実際のところではないでしょうか。

人生、生まれたときから ずっと、節目へ毎の場面は「はじまり はじ  
まり！」の連続で、小さな子ども時代にも、新たな出来事や状況  
を前にして、それぞれが一人前に与えられた世界の前に立ち、人生  
芸術をつむいでいくのですわ。

入園、進級から数週間、長いへ時間に思えたかもしれませんが、  
はじめの数日間 朝に涙していた子が、今はすれ違いざまに  
にこっとして手を振ってきます。

また 別の子は、砂でご馳走をこしらえて、「はい どうぞ」と届けて  
くれます。

卒園した前の青バッチさんがしていたり、言っていたのと、同じように  
「あおばっちはきびしい！」とか「だっこして！」と とびついて  
きたりする青バッチの子もいます。

今年の春のひとりひとりの幕開けが、たくさん期待と、(大きな不安  
のない)未知なるものへのどきどきの中で うれしく行われますように！と  
祈っています。

こうして毎年、子どもたちはもちろん、大人たちも この場で  
それぞれの幕開けのセレモニーを行ってきたことでしょう。

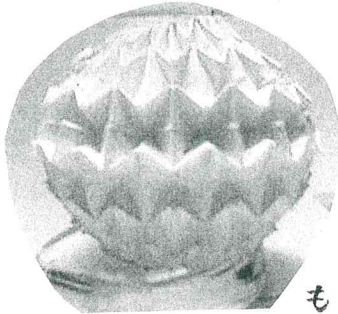
折りしも 夢窓幼稚園は 今年 60周年を迎えます。

この場所で 60年の歳月。それは それはたくさんの子どもたち、大人たちが、それぞれ一人ひとりのかけがえのない世界への向き合い方、開き方を展開したのでしょう。

しかし同時に 共通の土壌の中で、ここならではの同質の何ものかを体験してきたような気もするのです。

「同じ釜の飯」に象徴されるような……言葉にしたらほんとうにささやかな何かかもしれないのですが……特別な何かを吸い込み、独特な香りを放ってきたのかもしれない……と。

先日いただいた あの紙を丹念に折って作られた「メタモルボール」を手にとって遊んだり眺めたりしていたときに 様々な思いが湧いてきました。



「どこから作り始められたのだろう」… 規則正しい細かい折の連続から、ひとつの見事な形態が生まれ、またその小さな単位同志のつながりはそのままでありながら、様々外の姿は変容していく……！そしてまた元に戻っていく。形態記憶というのもこうして作られていくのではとイメージしてしまいました。

もし 夢窓幼稚園60年の独特の空気というものがあるとしたら、同じように、ひとつひとつ別々の個性が自分自身をしっかりと保ちながら、時を超えて重なるようにして作り出してきたのではないだろうかと思ったのです。一人ひとりがそれぞれらしくあるからこそ、個々が崩れることなく、全体に委ねることなく全体に共通の気分を生み出し、大切な記憶のように育みの力として個を支えてくれる力として働いてくれているのかもしれません。

ありとあるものに「いのち」を感じ受けとめる「共感」。

そこから生まれてくる「親和力」。さらに新たないのちを生み出す「イマジネーション」と「創造力」。

それらを「吾らが」に「こにこむら」に響かせていたいと願う「憧れ」

その道程の中、この60周年の記念すべき時に、あらためて私たちは一人ひとりの存在の意味をお互い受けとめ合いながら、共に人と人とがよろこびの中で生きることのできる社会を模索したいと思っています。

4月、この60年の「記憶」にも見守られ、今年の「はじまりはじまり」をスタートできました。5月私たちも作り手になって、それぞれの私たちを、そして私たちの生きる土壌を形作っていければと願っています。

園長 升光 泰雄